

法廷ディスコース分析 — コーパス言語学からのアプローチ

中村 幸子
(愛知淑徳大学)

In recent years, research on legal discourse has been on the rise in the United States and United Kingdom. A new discipline, "forensic linguistics" was born and has developed as part of linguistic research. Although the work of forensic linguistics in early days was "usually undertaken as an intellectual challenge and almost always required the creation, rather than simply the application, of a method of analysis" (Coulthard 1994: 27), the advancement of computer technology since the 1990s and beyond has provided forensic linguists with a new analytical tool, known as corpus linguistics. This new discipline not only enables them to process a large volume of data but also provides them with a new method of analyzing those data. In this paper, I shall first overview the forensic text analysis conducted in the U.K., then, evaluate usefulness of corpus linguistics for courtroom discourse analysis and finally discuss its relevance to interpreter-mediated legal discourse in Japan.

1. はじめに

欧米では司法の分野において供述書の偽造や権力による不正をチェックするツールとしてコーパスが用いられており (Coulthard 1992, 1994, 1995; Woolls and Coulthard 1998)、法言語学者が鑑定人 (expert witness) として出廷し言語学的観点から証言の解釈に関する助言を行うケースも増えてきているという (Stubbs 1996)。また通訳を介した法廷ディスコースに関する研究も盛んに行われるようになってきている (例えば Berk-Seligson 1990, 1999; Hale 1999; Rigney 1999 等)。一方、日本においては法廷での録音は許されておらず、捜査段階での供述の録音などを研究目的で入手することすら困難である。したがって、録音された供述をエスノグラフィ的手法 (ethnographic methodology or ethno methodology) に基づき、できる限り忠実に再現したトランスクリプト

NAKAMURA Sachiko, "Legal Discourse Analysis -- a Corpus Linguistic Approach."

Interpretation Studies, No. 6, December 2006, Pages 197-206.

c) 2006 by the Japan Association for Interpretation Studies

リプトによる分析や法廷談話分析 (forensic discourse analysis) などの研究も進んでいない。外国人被疑者取調べや被告人尋問、証人尋問において、ある言葉の意味や解釈が争点となった場合、どのようにその言葉の「一般的な使われ方」や「一般的な意味」を解釈し、客観的かつ合理的に一般の人々に示せるだろうか。通常、被告人や証人は法律の専門家ではない一般人であり、彼らが法廷で話す言語は日常生活における言語使用に近いものと考えてよい。したがって、法廷での被告人発言や証人発言の特徴を大規模コーパスと比較することによって、その発言の一般的な意味を客観的に示すことが可能になる。本研究ノートでは、欧米での法言語学とコーパスの関係、およびコーパスの有用性を考察した上で、コーパスツールを利用した発話分析の例を概観し、日本での同様の研究の可能性を示唆したい。

2. イギリスの言語研究における法言語学の流れ

イギリスの言語研究の潮流は「過去 50 年以上にわたって経験主義、実用主義中心」であり「言語は実際に用いられている本物の用例を対象に研究すべきである」(Stubbs 1996) とする考え方が根強い。このような背景からコーパス言語学の誕生は当然のことと考えられる。コーパス言語学のような経験主義的言語学は、実例を重視し、文脈の中で存在するデータを研究対象に「ありのままのデータに一切の人為的操作を加えることなく、分かった事実を記録することが重要」(Sinclair 1990) とされる。つまり、Firth, Halliday, Sinclair に代表されるテキスト分析の伝統の流れとともに、発話行為論 (Speech Act Theory)、語用論 (Pragmatics)、エスノグラフィ (Ethnography) などが発展し、それらの手法の具体的かつ社会的応用分野として法言語学 (Forensic Linguistics) や談話分析 (Discourse Analysis)、さらにはそのツールとしてのコーパス言語学などが発展してきたとあってよい。

2.1 談話分析とは何か

談話 (ディスコース discourse) とはコミュニケーションを達成するために用いられるあるまとまりを持った言語単位であり、1 語でもディスコースは成立するが、コミュニケーションが成り立っていない場合はどんなに長くてもディスコースということとはできない。ある言語表現はコンテキストに支えられて初めてディスコースとなる。コンテキストとは話者の目的、媒体、話し手と聞き手の関係、状況、文化背景、歴史等幅広い意味合いを持つ。談話分析でもやはり生のデータが重視され、欧米の法言語学における談話分析では、供述書の偽造や権力による不正をチェックするといった実践的な研究が社会的貢献につながっている (Levi 1994)。以下では、発話の解釈に関わる多数の事件のうち、Coulthard の指摘した代表例を取り上げる。

2.2 発話の解釈をめぐる言語学的解釈

Coulthard (2005) は発話の解釈をめぐる興味深いケースを指摘している。それは、ある西インドなまりの強い男が列車の中で “shot a man to kill” と言ったとして逮捕されたものの、男の発話はむしろ “showed a man ticket” と解するほうがコンテクスト的に自然であると音韻学を専門とする言語学者が助言したケースである。司法当局の解釈に対して、言語学者が文脈に基づく再解釈を行った一例といつてよい。

次に取り上げる例は 1950 年代のイギリスで起きたいわゆる Bentley Case と呼ばれる事件である。Bentley という青年と Craig という仲間が逮捕された時、Bentley が Craig (銃を所持) に向かって “let him have it, Chris” と叫んだため、Craig は警官に向かって発砲し警官が死亡したという事件で、この “let him have it” の解釈をめぐって、これを “shoot him” と解する検察当局と “give him the gun” と解する被告弁護人が長期間争った後、“shoot him” の解釈が採用され Bentley は有罪となったという事件である。後年さらなる言語学的鑑定が行われた結果 Bentley の無罪が認められたわけだが、実は供述調書そのものが警察当局による偽造であったことが判明したのである。この言語学的鑑定には WordSmith というコーパス分析ツールが用いられている (詳細は Coulthard 1994, Woolls and Coulthard 1998 を参照)。

上述のケースが示唆することは、日本での外国人事件の通訳にあたる通訳人にとって重大な意味を持つ。この点については後半で詳しく論じたい。次に、Stubbs (1996) が指摘した、法廷の場において事実とその表し方の違いにより聞き手にある種の効果が生じる例を取り上げる。

2.3 事実とその表現

Stubbs の指摘は、言い換えれば、同じ事実あるいは事象を表すのに、もしある意図を持って語彙を選択すれば陪審員の認識に影響を与える可能性があるということである。ここで取り上げる例は Loftus and Palmer (1974) の法廷実験である。彼らは、被験者にある交通事故の映像を見せ、その後、“How fast were the cars going when they hit each other?” という質問をする。この hit の部分を smash, collide, bump, contact などに変えて質問すると、被験者が予測する車の速度は smash や collide を用いた場合のほうが bump や contact よりも速いという結果が出る。さらに “Did you see any broken glass?” という質問に対しては、“cars smashing into each other” という表現を用いた場合、実際には映像には割れたガラスなどはまったく映っていなかったにもかかわらず、“yes” の回答が多かったという結果が出ている。したがって、smash という語を使うことによって被験者にある種の先入観が生じたと考えられる。Stubbs は、この実験では被験者は映像を見ているにもかかわらずこのような回答をする傾向にあり、人の認識はいかに言語に左右されることがわかると指摘している。この実験が示唆するもうひとつの点は、同・類義語といえどもその選択を誤れば正しく意図が伝わら

ない可能性があるということである。日英通訳において通訳者は非常に微妙な語彙の選択をしなければならず、日本での外国人事件の通訳に当たる通訳人にとっても、前述の 2.2 のケースに加えて、関連の深い問題ではないだろうか。

以下、上述の 2.2 および 2.3 に挙げたケースについて、コーパスツールを用いた分析の評価を行う。その前に、言語解釈・分析のためのリソースとしてのコーパス、辞書、ネイティブスピーカーの 3 者を比較してみたい。

3. コーパスの有用性

3.1 辞書 vs ネイティブスピーカー vs コーパス

a) 辞書の弱点

われわれは、通常、単語の意味を調べるのに辞書を利用する。辞書はスペースの制約上、冗漫な記述は避ける、同じ用例は二度現れないという傾向があるため、多くの用例を体験することによる用法の習得ができにくいという弱点がある。また、コンテキスト内の実際の言語使用が説明されているわけでもない。学習者にとってはその権威が絶対的となっている辞書も Bolinger (1965) によれば “frozen pantomime” (凍りついたパントマイム) でしかない。

b) ネイティブスピーカー

単語の意味や用法に関して、ネイティブスピーカーに聞けば必ず正しい答えが返ってくるのだろうか。ネイティブスピーカーは、ある表現について自分の経験に照らし合わせてそれが一般的か否かの判断をするが、なぜ一般的なのか、または一般的でないかを説明することは難しい。通常、母語の文法は無意識のうちに獲得されているものであり、言語の専門家でなければ、その仕組みを系統立てて説明することは難しいのはごく当然のことである。

c) コーパス

コーパスが辞書やネイティブスピーカーより優れているとは一概には言えないし、またコーパスがあればすべての疑問が解決するわけでもない。しかし、大量の用法の実例が瞬時に表示されるという点では両者の弱点を補うものであるとあってよい。それゆえコーパスの用途も多岐にわたる。コーパスはその大量のデータから、語の隠れた特徴やパターンなどを明らかにすることができるため、辞書編纂から英語語法研究、社会言語学的研究、さらには文体論・文学作品研究など、言語テキストを扱う広範な研究領域に利用されている。英語教育への貢献の余地はさらに大きく、筆者は語彙の組み合わせ、共起表現に着目した同義語の使い分けのツールとしてコーパスを利用し日英通訳の指導に役立てている (Nakamura 2002)。Coulthard (1994, 1995) 等が行っているのは、主として文体や語彙の特徴から文書偽造や盗作を見抜くことや作者鑑定などである。以下に Coulthard (1994, 1995) や Woolls and Coulthard (1998) によるコーパスを用いた Bentley 事件の分析を紹介したい。

3.2 コーパスツールを用いた分析の例

3.2.1 Bentley 事件

以下は、前述の Bentley 事件における Bentley の供述調書の中に見られる “then” という語のコンコーダンス出力結果である（下線は筆者）。

then ran after them

We all talked together and then Norman Parsley and Fank Fazey left.

Chris Craig and I then caught a bus to Croydon

ot off at West Croydon and then walked down the road where the toilets are

Chris then jumped over and I followed

Chris then climbed up the drainpipe to the roof

Up to then Chris had not said anything

the flat roof at the top. Then someone in a garden on the opposite side

The policeman and I then went round a corner by a door

Chris fired again then and the policeman fell down

The policeman then pushed me down the stairs

Coulthard (1994, 1995) はこの事件に関わった Bentley、警察、証人の発話の録音を書き起こし小規模なコーパスを作成している（それぞれ、Bentley Corpus, Police Officers Corpus, Witness Corpus と称す）。このうち、Bentley Corpus では標準より then の使用が多く（582 語中 11 例）、58 語に 1 回という高い割合で出現している。一方 Police Officers Corpus では 78 語に 1 回であり、Witness Corpus では 930 語中 1 回しか出現していない。大規模コーパス (COBUILD Bank of English) の一般発話カテゴリーでは then の頻度は平均して 500 語に 1 回である。従って、Bentley の供述は一般的な言語使用とはいえないのではないかと合理的な疑いが生じる。むしろ、Police Officers Corpus 中の then の頻度が Bentley の供述とされるものと同程度の頻度であるという。さらに then の位置が主語の後、動詞の前に置かれること自体が一般的ではないにもかかわらず、Bentley Corpus では主語の後に使用している例が多い（下線を付した 11 例中 7 例）。ところが Bank of English 内では “then I” という語順のほうが “I then” という語順より 10 倍多く出現している。一方「主語 + then」という語順は警察の発話に特徴的に出現している。Bentley の供述記録と Bank of English を比較すると、then の使用頻度と位置を見る限り、Bentley の発話を正確に記録したものとは言えないという結論に至る。このような分析が行えるようになったのは、近年のパーソナルコンピュータの発達のおかげであると言ってよい。Bentley は 1953 年に絞首刑が執行されたが、1999 年になって Coulthard の指摘が取り入れられ、死後に無罪となっている。

次に、もうひとつのコーパス利用事例として 2.3 で指摘した語彙について Stubbs (1996) が行った共起語検索を見てみる。

3.2.2 Stubbs による共起語分析

Stubbs はそれぞれの語がどのような語と共起するのかを1億2千万語を収録したコーパスで検索している。それぞれの共起語を表にまとめると次のようになる (表 1)。

表 1 Stubbs による共起語分析

語	共起語	共起語の特徴
hit	areas, badly, bottom, car, earthquake, flooding, hard, hardest, jackpot, recession, sales, six, target	特定の準拠枠を示す傾向はなく幅広い語と共起する。
smash	bottles, broken, bullet, car(s), glass(es), looted, police, windscreen, window(s)	犯罪や暴力に関わる語と共起する傾向がある。
collide	aircraft, car, jet, lorry, mid-air, plane, ship, tanker, train, trawler, vehicle	大型の車両を表す語と共起する傾向がある。
bump	accidentally, car, head, lurched, stumbled	偶然性、不器用さ、ぎこちなさを意味する語と共起する傾向がある。
contact	surface, you, office, doctor, firm, direct, hotel(s), them, Social Services,	「接触する」の意味より「連絡する」の使われ方が多い。

このうち、contact に関しては調査されていないため、筆者が COBUILD コーパスの British Transcribed Speech (1千万語) のカテゴリーで検索した。表 2 はその結果を示したものである。これを見ると、囲み線で囲まれた共起語のうちの多くが、人物、場所、機関、電話番号などであり、contact は「～に連絡する」という意味で用いられることが多いということがわかる。「接触する」は“contact surface”という組み合わせで1回しか出現していない。COBUILD Concordance Sampler はオンラインで利用できるデモ版であるため40例しか表示することができないが、傾向はつかむことが可能である。少なくともこの話し言葉コーパスでは、動詞としての contact は「接触する」よりも「連絡する」の意味で用いられる頻度が高い。

以上の例からわかるように、「ぶつかる」という意味の hit の同・類義語である smash, collide, bump, contact それぞれの共起語はかなり異なっており、常に置き換えが可能というわけではない。共起関係すなわちコロケーションは慣習的なものであり、その組み合わせには一定のパターンがある。したがってそのパターンを逸脱するような組み合わせを行えば慣習が破られることとなり、聞き手にとっては特異なものと感じられる。ゆえにどの語彙を用いるかによって話者と聞き手の間に認識のズレが生じてしまうことになる。語彙の選択は、意味の操作につながりかねない重大な危険性を孕んでいると言えよう。

表 2 “contact” のコンコーダンス検索結果

<p>These machines do [ZF1] lose [ZF0] lose</p> <p>system [ZZ0] Staff announcement. XX please</p> <p>touting for business but I just felt I had to</p> <p>if [ZF0] if I lost something on a bus I'd</p> <p>researchers will take it up. I thought I would</p> <p>you know and I just said Sorry I can't er er</p> <p>with the notion of er support and possibly</p> <p>[ZG0] [F01] [ZZ1] on phone [ZZ0] So er to</p> <p>er so what'd probably be better to do is</p> <p>either. We'll give you address to er</p> <p>If you want further information you can</p> <p>meant in fact that I'd got er access to well</p> <p>that in the meantime what you must do is</p> <p>Erm this person is in prison erm if there is</p> <p>special break then obviously you need to</p> <p>fortunate on the basis that we now have erm</p> <p>Well I haven't actually had very much</p> <p>[ZGY] to go community centres [ZGY] and</p> <p>commander which used to be MX used to</p> <p>about what's available locally then</p> <p>up as a benefit enquiry. People do tend to</p> <p>it [ZF0] it isn't actually [me] that they would</p> <p>may well ring Family Credit or get them to</p> <p>contact other departments they may need to</p> <p>ourselves for information erm or we may</p> <p>a [ZF0] a leaflet away complete it and then</p> <p>to get the details where as before we used to</p> <p>[ZF1] a [ZF0] a worthwhile [guy] for you to</p> <p>[F03] No. You book a party like [F0X] You</p> <p>there [M01] Yeah [F01] even though I don't</p> <p>did you ever feel erm able if you like to</p> <p>[ZGY] and you know okay with me [ZGY]</p> <p>said I've been given your name and told to</p> <p>family [M01] So you've got So er you can</p> <p>big problem I would imagine you'd have to</p> <p>from that questionnaire people con could</p> <p>it [M01] I mean if you wanted you could</p> <p>we [ZF0] we attempt to visit them we will</p> <p>Christmas. [F02] Right. Will you actually</p> <p>if you [ZGY] had sort of [ZGY] schools</p>	<p>contact very readily. Okay. So it will just</p> <p>contact reception [ZGY] [M01] [ZZ1] pages</p> <p>contact you. Of course [tc text=pause] I now</p> <p>contact the bus company first of all. Erm</p> <p>contact you [000] in the hope that erm people</p> <p>contact you any other way only by phone but</p> <p>contact surface contact and support and most</p> <p>contact seven three [F0X] [ZGY] [F01] [ZZ1]</p> <p>contact our office actually based there and</p> <p>contact the leukaemia research people</p> <p>contact Ryder York their telephone number in</p> <p>contact with doctors and the elderly the</p> <p>contact your mother's doctor and say I simply</p> <p>contact it may be as extreme which [ZF1] I</p> <p>contact them direct [ZGY] [tc text=pause]</p> <p>contact with a bloke who can give us advice</p> <p>contact with [ZGY] at all until now erm and</p> <p>contact you know with them and [ZGY] and</p> <p>contact me and a few others. We go and have</p> <p>contact us at Minster F M in Action on 0 nine 0 four</p> <p>contact us when things go wrong erm when</p> <p>contact so I mean forgive me if my sort of</p> <p>contact them themselves. [M01] Mm. [M02]</p> <p>contact firms et cetera to erm determine a</p> <p>contact such as hostels [M01] Yeah. [M02]</p> <p>contact somewhere [M01] Yeah. [M02] erm</p> <p>contact the employer straight away. [M01]</p> <p>contact. [M01] Yeah. [M02] Er he's out at</p> <p>contact them rather than the other way round</p> <p>contact her that often I know she's there if I</p> <p>contact the people like I don't know say the</p> <p>contact with a number of them still and they</p> <p>contact you and that's as far as it goes. And so</p> <p>contact Social Services in [F01] Yeah [M01]</p> <p>contact possibly social services and say Look</p> <p>contact me voluntarily [F02] Oh I see [F01]</p> <p>contact [ZGY] if you had [ZGY] the first</p> <p>contact them. It could be for a number of</p> <p>contact [ZZ1] company name [ZZ0] to</p> <p>contact you and say [ZGY] they want to</p>
---	---

(用例中の囲み線は筆者が加えたものである)

4. 日本における言語学的なアプローチの必要性

アメリカ、イギリス、オーストラリアなどの欧米諸国では、言語学者が言葉に関する証拠の鑑定を行ったり、専門家証人・鑑定人として出廷するケースが増えている。欧米の法廷では、ネイティブスピーカーのみによって行われている裁判においても言葉の解釈をめぐる争いになる状況があり、言語学者が「鑑定人」として助言するような仕組みが確立していると言ってよいであろう。

一方、日本での外国人事件において言語学者が言語学的な助言を行うというような制度は筆者が知る限り存在しない。実際には、仮に外国人被告人の英語が完璧に聞き取れたとしても解釈上の問題が生じる可能性があるにもかかわらず、現在の日本の裁判制度の下では発話の解釈は主として通訳人の解釈能力に委ねられていると言っても過言ではない。そのような状況では通訳者に過度の負担がかかっているのではないかと危惧する。

今後、裁判員制度が発足する日本においても、コーパスを利用したテキスト分析という手法も用いて、法廷通訳を含めた司法の場での言語使用のあり方に新たな視点を提供することも有用と考える。そのためには「録音」データが欠かせない。英国では取り調べ段階での録音はもとよりビデオ撮影も行われ、ありのままのやり取りが記録されているため、通訳の正確さ適切さも客観的に判断できるのに対し、日本では捜査段階での「可視化」が進んでいない。したがって、研究者が研究目的に録音テープを入手することさえも極めて難しい状況であった。しかし、この点に関し、画期的な動きがあった。最高検察庁が2006年5月、取り調べの一部について試験的に録音・録画する方針を正式に発表したのである(2006年5月10日付読売新聞)。これによりただちにそうした録音・録画媒体が学術目的のために研究者に開示されるわけではないにせよ、今後日本でも、取り調べ段階の捜査や法廷での被告人尋問に焦点を当てたテキスト・ディスクコース分析研究が行われるための第一歩となることを期待したい。

5. おわりに

以上、欧米におけるコーパスツールを利用した発話分析の例を紹介し、コーパスの有用性を論じてきた。欧米の法廷言語者は捜査段階での供述の録音をもとに忠実なトランスクリプトを作成し、コーパスツールを用いて発話の客観的な解釈を行うことに成功している。彼らは法廷で鑑定人として助言したり、その専門知識や技能を文書偽造や盗作の発見に役立てており、多大な社会貢献を行っていると言えよう。

また、コーパスは語彙の組み合わせやコロケーションのパターンを観察する際に大いに役に立つ。同・類義語についての法廷実験から、不用意に言い換えたり、意図的な語彙の組み合わせをすることにより、聞き手にある種の先入観を抱かせることにつながるということがわかった。語彙の選択や組み合わせは非常に微妙なものである。このような微妙な語彙の組み合わせについても、コーパスツールを利用して客観的にパター

ンや傾向を調べることでミスコミュニケーションを避けることが可能である。

近年、パーソナルコンピュータの処理能力の大幅な向上により大量のデータを瞬時に処理することが可能になり、またコンコーダンスソフトウェアに代表されるテキスト分析ツールの進歩もあいまって言語分析のメカニカルな側面では研究者の労力は大いに軽減できるようになった。しかし、客観的かつ信頼性の高い結果を得るためには、扱うデータそのものが「ありのまま」の言語使用を記録したものでなければならない。法廷ディスコースにおいてそれぞれの当事者の発話が忠実に記録されてはじめてその記録が「真正」なのか「偽造」されたものなのかが判断できるのである。いかにコーパス言語学における技術革新が進もうとも、ありのままの発話データを扱わない限りその技術革新の真の恩恵を得ることは難しいのではないだろうか。

※本研究ノートは、2006年4月2日に名古屋国際センターで開催された「日本通訳学会コミュニティ通訳分科会第8回例会」におけるパネルディスカッションでの筆者の発表に、大幅に加筆訂正を加えたものである。

著者紹介：中村幸子 (NAKAMURA Sachiko) 南山大学外国語学部英米科卒業。英国アストン大学大学院修士課程修了 (MSc in Teaching English for Specific Purposes)。およそ20年にわたり名古屋地域で通訳者として活躍中。愛知淑徳大学、中京大学、名古屋大学国際言語文化研究科等で非常勤講師として通訳教育にも従事。

【参考文献】

- Berk-Seligson, S. (1990). *The Bilingual Courtroom: Court Interpreters in the Judicial Process*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Berk-Seligson, S. (1999). The Impact of Court Interpreting on the Coerciveness of Leading Questions. *Forensic Linguistics*, Vol. 6, No. 1, pp. 30-56.
- Bolinger, D. (1965). The Atomization of Meaning. In Jakobovitz & Miron 1967 (Eds.) *Reading in the Psychology of Language*, pp. 432-448.
- Coulthard, M. (1992). Forensic Discourse Analysis. In Coulthard, M. (ed.), *Advances in Spoken Discourse Analysis*. London: Routledge, pp. 242-254.
- Coulthard, M. (1994). On the Use of Corpora in the Analysis of Forensic Texts. *Forensic Linguistics*, Vol. 1, pp. 27-44.
- Coulthard, M. (1995). The official version in Coulthard, C. and Coulthard, M. (eds.), *Texts and Practices: Readings in Critical Discourse Analysis*. Routledge, pp. 166-178.

- Coulthard, M. (2005). Some Forensic Applications of Descriptive Linguistics. [Online] <http://www.business-english.ch/downloads/Malcolm%20Coulthard/Forensic.applications.pdf>
- Hale, S. (1999). Interpreters' Treatment of Discourse Markers in Courtroom Questions. *Forensic Linguistics*, Vol. 6, No.1, pp. 57-82.
- Levi, J. (1994). *Language and the Law: A Bibliographic Guide to Social Science Research in the U.S.A.* Chicago: American Bar Association.
- Lofus, E.F. and Palmer, J.C. (1974). Reconstruction of automobile destruction: an example of the interaction between language and memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 13, pp. 585-9.
- Nakamura, S. (2002). *A Study of Restrictive Collocational Relationships of Synonyms: Synonym Grid as a Differentiation Tool.* Unpublished M.Sc. Dissertation: Aston University.
- Rigney, A.C. (1999). Questioning in Interpreted Testimony. *Forensic Linguistics*, Vol.6, No. 1, pp. 83-108.
- Sinclair, J. (1990). *Corpus Concordance and Collocation.* Oxford: Oxford University Press.
- Stubbs, M. (1996). *Text and Corpus Analysis.* London: Blackwell.
- Woolls, D. and Coulthard, M. (1998). Tools for the Trade. *Forensic Linguistics*, Vol. 5, pp. 33-57.